

令和2年度新潟県病虫害発生予察情報・特殊報第1号
(ツマジロクサヨトウの被害初確認)

令和2年6月15日
新潟県病虫害防除所

- 1 病虫害名 ツマジロクサヨトウ (チョウ目、ヤガ科) 、*Spodoptera frugiperda*
- 2 発生植物 スイートコーン
- 3 発生経過
令和2年6月9日、新潟県内のスイートコーンほ場において、ヨトウムシ類幼虫による食害が確認され、横浜植物防疫所新潟支所に同定依頼した結果、6月10日に県内では未発生であったツマジロクサヨトウと確認された。
- 4 寄主作物
本虫の寄主範囲は広く、アブラナ科 (カブ等) 、イネ科 (トウモロコシ、イネ、サトウキビ等) 、ウリ科 (キュウリ等) 、キク科 (キク等) 、ナス科 (トマト、ナス等) 、ナデシコ科 (カーネーション) 、ヒルガオ科 (サツマイモ等) 、マメ科 (ダイズ等) などの80種類以上の作物を加害する。
ただし、現在のところ、本県における寄生確認作物はスイートコーンである。
- 5 形態および生態
成虫は開張約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、オスのみ前翅中央部に白斑を持つ。終齢幼虫は体長約40mmで頭部の逆Y字および尾部の斑点が特徴である。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、メスの体毛で覆われる。
本虫は暖地に適応した種 (南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産) であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することはできない。
- 6 被害
中米・ニカラグアの調査では、肥大期から成熟期のトウモロコシにおいて、被害株率が55～100%の場合、収量が15～73%低下した報告がある。
本虫は、幼虫が新葉の葉鞘部や若い子実を食害する。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する。
- 7 防除対策
早期発見・早期防除に努める。現在のところ、ツマジロクサヨトウに登録のある農薬はないが、植物防疫法第29条第1項の規定により、県の指導で防除を行う場合に限り別に指定される農薬 (別添「ツマジロクサヨトウの薬剤防除に使用できる農薬一覧」を参照) の使用が可能である。また、記載されている希釈倍率、使用方法、使用時期、散布量、回数を守ることで、出荷停止等、流通に支障が出ることはない。

- (1) 多発すると、被害が拡大する恐れがあることから、ほ場をよく見回り幼虫の早期発見に努める。
- (2) 発生ほ場においては、別に指定される薬剤の散布を行うか、薬剤散布が困難な場合は、早期刈取りを実施する。
- (3) 散布に当たっては、新葉の葉鞘基部に潜り込んでいる幼虫に届くよう、株の上部までしっかりと散布する。また、老齢幼虫や作物の内部に潜り込んでいる幼虫には農薬の効果が低くなるので、本種の活動が活発になる早朝に、若齢幼虫や葉の表面にいる幼虫に対して、農薬を散布することが望ましい。
- (4) 農薬の使用にあたっては、散布は無風又は風が弱い時に行うなど近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向、防除器具のノズルの向き等にも十分注意するとともに、隣接農作物の栽培者に対して散布予定農薬の種類や散布時期等を事前に連絡するなど、農薬の飛散（ドリフト）に留意する。
- (5) 幼虫の分散を防ぐため、収穫後は直ちに耕耘する。

8 その他

ツマジロクサヨトウの詳細な情報は、農林水産省のホームページで公開されている。

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/tumajiro.html



図1 幼虫



図2 スイートコーンの食害状況（画像提供：新潟普及指導センター）